

楽観できない韓国の出生率の微増



日下部元美

2024年11月に韓国北東部・江陵カウラウのホテルに泊まった時のことだ。ロビーに入るとベビーカーがたくさん並んでいた。

私の横を通りすぎたのでチラッと見ると、犬がひよこつと顔を出した。ほとんどがベビーカーではなく犬用カートだ。韓国ではベビーカーより犬用カートの方が多くとよく言われる。

合計特殊出生率が世界最低水準の韓国では、ソウルの一極集中や、学歴競争、不動産の高騰などを背景に晩婚化や非婚化が進んでいる。子供のいない共働き夫婦も増えている。年間出生数は約10年間で2分の1近く減った。合計特殊出生率は17年以降、過去最低を更新し続けていたので、24年も更新すると思っていた。だが、統計庁が2月に発表した暫定値は0・75で前年の0・72から微増した。

新型コロナウイルスの収束を受けて結婚や出産の機運が回復したことが影響したとの見方が強い。また、30代の出生数が約1万1000人増えた。ベビーブーム（1955〜74年）世代の子供の多くが30代

に入ったことも背景にあるだろう。

政府は少子化対策予算を増額し続け、育休を取った男性や中小企業への支援などを導入・拡大してきた。出産・育児支援に取り組む企業も増えた。育休取得者のうちの男性の比率は31・6%で、15年の5・6%から大幅に増加した。

だが、20代の出生数は前年から減少した。母親の平均初産年齢は年々高くなっており、前年比0・1歳増の33・1歳だった。女性の仕事と出産・育児の両立は依然として課題が多いことの証左だ。新入社員の平均年齢が30歳前後と遅いのも大きな課題だ。苛烈な就職競争を背景に経歴作りに時間をかけ、就職浪人をする人が多い。大企業と中小企業の賃金格差が大きく、就職できても更なるキャリアアップを目指す。

学歴や就職の競争が激しくなるのは、成功モデルが画一的であるためだ。就職支援会社を営む女性（33）は「経済的な成功は、上には上がいて、きりがない。私の周りも、いつまでも自分に満足できない人が多い」と指摘する。「そういう人は当然子供を持つことは考えられないし、憧れも抱かない」と説明する。生き方の価値を分散するための構造的な改革も求められているのではないだろうか。